
零也の日常。

忍者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零也の日常。

【コード】

N0152D

【作者名】

忍者

【あらすじ】

神崎零也の日常。 笑いあり、笑いあり、笑いありのドタバタラブコメディー!!!!

第零話 駅

point of view 【???】

「久しぶりだな、銀沢市。六、七年ぶりか？」

電車から降りて、駅のホームで深呼吸する。

自販機でペットボトルのジュースを買い、これから過ごすであろう家に向かう。

今回の話は、ここまで。

「これだけ？短くね？」

黙れ主人公。

第零話 駅（後書き）

point of view というのは視点のことです。

第一話 再会

Point of view 【??.?】

「ん〜」

朝。

目を覚まし、近くに置いてあるケータイの時計を見る

「遅刻か？」

なぜか、ラブコメは主人公の遅刻から始まることが多い。だからこ
んかいもそんなパターンかと思う。

「って何考えてんだよ。てか、ラブコメってなんだ？」

と、自分で考えたことに、自分でツツコミをいれる。
そして、ケータイの時計に視線を移す

AM 4:30

「早く起きすぎたな」

微妙な時間に起きてしまった。嬉しいような、悲しいような。二度寝しようか、もう起きようか、自己紹介しようか。

自己紹介にしよう

俺の名前は神崎零也。かんざき れいちや

高校二年生。

髪は前髪が目がすこし隠れるぐらいにのびている。

目が悪く、コンタクト使用。

メガネは邪魔だから、使わない。

と、少し自己紹介したところ七時になった。

「はやっ！？自己紹介を一回しただけで二時間半も経過すんのかよ
「！」

あと、特技はツッコミだ。

「ってやばっ！！遅刻するっ！！」

「うおおおー！！マツハハいいいー！！」

がんばって自転車こいでます。本当は徒歩で行ける距離なんです。登校初日で遅刻はやだからな。俺の自転車、（名前は、チャーリー君）で登校してるわけだ。

point of view 【神崎 零也】

「やっと、着いたぜ。さすが、俺。　　っていつか職員室ってどこだ？」

はじめて来た学校。どこになにがあるかわからねえ。どうしようか？

「聞くに決まってるよな。」

人に聞く作戦をするため、人を探す。

といっても人はたくさんいるので探すほどじゃない。

「あ〜。」

一番近くにいた女子に話しかける。

「なにかな？」

その子はポニーテールで目はパツチリしている。運動が得意そうだ。背は俺より少し小さいくらい。

って何観察してんだよ。俺は変態か？

「職員室ってどこ？この学校に来るのはじめてで。」

「あっちだよ」

ゆびをさして教えてくれた。

「ありがとう」

お礼を言って職員室に向かおうすると

「ちょっと待って！」

さっきの子に呼び止められる。

「あなた二年生だよね？」

名札に各学年に違う色の線が入っていて、その名札を見れば何年生かすぐわかる。

「ああ。だけど、それがどうかした？」

普通に疑問に思ったので普通に聞く。

「昔、一緒に遊んだ子に似てるから。で、その子が高二で帰ってくるって。」

俺も昔そんなような事があった。懐かしいなと思い、約束をした子

の名前を呟いてしまう。

「綾香……か。」

「え、今何て言った？」

俺の独り言に反応する。

それも、期待するような目で。

「悪いな。クセで独り言が多いんだよ。」

「違う！―さっき『綾香』って言ったよね！！ 私の名前も綾香なの！！― あなたの名前、零也でしょ！！―」

自己紹介もしてないのに、名前をよばれる。そんなことにびっくりする俺。

「お前、もしかして……月代つきしろ綾香あやかか？」

「うんっ、そうだよ！久しぶり、零ちゃん。」

急に口調が変わる綾香。

まあ、昔は凄く仲良かったからな。おかしいことじゃない。

「ああ、久しぶり。ってか、この年で零ちゃんはないだろ。」

「零ちゃんは、いつまでたっても零ちゃんなの。」

意味わかんねえよ……。と思いつつも本来の目的をおもいだし、話を中断する。

「そろそろ職員室に行かんといかんから、後でな。」

「うん、じゃあねー!」

point of view 【月代 綾香】

零ちゃんが職員室に行くを確認した後、私は昔の事を思い出す。

「エへへ〜。」

思わず、変な声を出し喜んでしまう。

昔から好きだった零ちゃんに会えて嬉しくないわけがない。

小学五年生の時、転校してしまった時からずっと忘れなかった。

私は誓う。

零ちゃんとラブラブになるって。

「覚悟しといてよ。零ちゃん。
ウフフフッ」

と、独り言をいい教室に向かう私。

point of view 【神崎 零也】

「ブエックション!!!」

廊下を歩いていると盛大にクシヤミをする俺。

「ロシアの殺し屋が俺を狙ってるな。」

神崎 零也はあほだった。

チャンチャン

第二話 アキレスケン池田と落書き

point of view 【神崎 零也】

「うーし、転校生きたぞ。仲良くしろよー」

綾香に職員室の場所を聞き、無事職員室にたどり着いた俺は、これからお世話になる担任の紹介を受けた。それで教室に案内してもらった

今、俺は廊下で待っている。先生が軽く俺の説明してるからだ。その先生は美人で若いんだが、しゃべり方がやけに男っぽい。

「せんせー！その子は男の子ですかー？女の子ですかー？」

女の子が質問しているらしい。クラスのテンションは上がりまくっている。

「なー、男子だ。っーか、めんどうだから入ってもらお。」

オイオイ、やけにアバウトな性格してんなあ。と思いつつ、教室に入る。

「ども、神崎零也です。これから、よろしくおねがいます。」

適当な挨拶をし、拍手をうける。このクラスの人達はみんな良い人そうだ。どっから見てもヤンキーって人もいない。

「じゃあ、あの窓側の空いてる席にすわれ。質問タイムは作らんから、空き時間に勝手にしろ。」

俺は先生に言われた通り、窓側の空いた席に座る。風が当たって気持ちいい。結構いい席だと思う。

「お前、零也か？」

「ああ、そうだけど？」

急に前の席の男子に名前を確認される。さっき自己紹介したばっかだろ、と思いながらも普通に返事をする。

「久しぶりだな、レイ。」

「へ？」

急にレイと呼ばれて、ビックリする俺。俺の事をレイと呼ぶのは昔よく遊んでた親友の“アイツ”しかいない。しかも、俺の前の席のコイツは“アイツ”によく似てる。

つてことは…。

「何だよ！思い出せねえのかよ？俺だよ！さいと…」「わかってるよ。『アキレスケン池田』だろ？」

「そうそう。俺の体の主成分はアキレスケンで出来ていて、残りは池と田んぼなのさ。」

「…ってそんなわけあるかい！！
アキレスケンでも池でも田んぼでもねえよ。」

俺の名前はさいと…」

「冗談だよ。斎藤建人。親友だろ？」

目の前にいる建人は急に立ち上がり涙と鼻水をズーズー出し、「親友よ」と言い抱き付こうとしてきたが俺はそれをかわしケツを蹴り飛ばす。

「レイ…お前…親友じゃなかったのか？」

「スキンシップだ。」

「なるほど…これで俺も安心して死ねる…。グフツ！あば…よ。」

建人の上手すぎる演技のせいで周りの人は沈黙し奇異の目で見てくる。

建人が死んでいるフリをしている間に筆箱から油性のマジックを取り出し、建人の顔に落書きをする。もちろん建人が気付かないように。

「おい建人！そろそろ授業はじまるぞ！起きろ！」

「おっ、わりいなレイ。」

「ああ、それよりトイレで顔洗ってこい。鏡見ながらな。涙やら鼻水やらでスゲエ汚いぞ」

「分かった」

「じゃあ始めるぞお！」

建人がトイレに行った瞬間に授業がはじまった。黒板の内容をノートに写そうとしたら…。

『なんじゃこりゃ〜〜！！』

建人の叫びが聞こえた。

第二話 アキレスケン池田と落書き（後書き）

零也 お、今回はコメディ入ってるな。

作者 前回まったく入ってなかったからな。

零也 でもラブがないぞ。一応ラブコメだろ。

作者 ノーコメントで。

零也 逃げんなっ

第三話 こいつはマイシスターDEATH(デス)

Point of view 【神崎 零也】

「零ちゃん。一緒にかえろー。」

登校初日目は変な問題も起きず、楽しく過ごす事ができた。友達もたくさんできたしな。

と、いうわけで今から帰りましょうってトコなんだが…。

「ねえ？聞いているの？一緒に帰ろーよー！」

綾香と一緒に帰ろうと誘われている。

今日は何だか一人で帰りたい気分だ。まあ、ここは断ろう。

「一緒に帰る？」

「わりい、俺一人で帰りてえんだよ。また今度な。」

「やだ、今一緒に帰りたい。」

「ワガママいうな。俺にも都合つつもんがある。」

「無いもん。」

「有るもん。」

綾香が急に黙る。なんか俺がいじめてるみたいでやな感じだ。はあ、これじゃあキリがねえよ。

仕方ない、ワガママを聞いてやるか。俺って優しいな、マジで。

「分かったよ、帰るぞ。置いてくぞ。」

俺はさっさと歩きだす。少し速めのペースで。

「え！？ホントに！？やった〜！〜！ってちょっと、待ってよ〜！〜！」

Point of view 【神崎 零也】

「とうとう着いてしまったか… 我が家。」

綾香と別れて十五分ぐらい歩き到着した我が家別にどこにでもあるような一軒家だ。特別変わってるような所もない。

だが、ドアの隙間から変な桃色のオーラが溢れ出ている。おかげさまで身体中からでる汗が止まらない。

「は、入るか…。」

ビビりながらも、我が家のドアノブに手をかける。

ガチャ

ドアを開ける。

あれ？何も起きない？

やったー。平和だぜー。ヤッホーイ。

俺の心は喜びのあまり踊りまくっている。コサックダンスにサンバにソーラン節にビリーズブートキャンプを。

「って、最後のは踊りじゃあねえだろ。」

自分の心に自分でツッコむ。なんだか切ないな。

「まあ、あの“恐怖”と再会するよりかは、よっぽどました」

「ねえ、お兄ちゃん。その“恐怖”って誰のこと？」

「決まってるんだろ。お前だよ。恐怖なんて言葉は、お前の為にあるよう…なも…ん……………」

「ふうん。お兄ちゃんは愛する私の事をそんな風に思ってたんだ。せつかくの二年ぶりの再会なのに…。」

やってしまったああー！！

こんな風に出会ってしまうなんて…。最悪だ…。謝るしか…。

「違うんだよ。あれだよ。お前と会えたのが嬉しくて頭おかしくなつちまって、変なこと言っちゃったんだよ。」

「本当に？」

「ああ。それにしても、しばらく見ないうちに綺麗になったな。見違えたよ。」

「エへへ。」

この俺の目の前でクネクネしてるのは、義妹の神崎かんざき 志織しおじ。義妹つても同じ年で誕生日が三ヶ月くらい俺の方が早いだけだ。

小五の時までここで志織ん家にお世話になってたんだが志織の父親の転勤で俺達はこの地から離れることになった。だが二年前に志織の父親が亡くなってしまったため、この銀沢市に帰ることになった。

だけど、俺だけじいちゃんに引き取ってもらった。が、そのじいちゃんも二週間前に死んじまった。

で、行くあての無くなった俺はまた志織ん家にお世話になることになった。

ちなみに俺の両親はとっくの昔に死んじやった。

俺の両親と志織の両親は仲が良かったらしい。だから俺は志織ん家に預かってもらってるわけだ。

あと、苗字だが俺の親の苗字と志織ん家の苗字が両親とも神崎らしい。

まあ、奇跡だな

「なあ、朋美さんは？」

「アメリカよ。仕事で。」「ふん。大変そうだな。」

「そうだね。」

つて、あれ？

朋美さんがいない？

つか朋美さんってのは志織の母親のことね。じゃなくて、朋美さんがいないってことは…

「お兄ちゃん、私と二人つきりよ。」

「へ？」

聞いた？この御方何言ってるんだか。
とうとう、狂ったのかな？この子。

「マジで？」

「マジで。」

「ホントに？」

「ホントに。」

「地デジ？」

「地デジ。」

.....

「絶対イヤだ。そんなんだったら、野宿の方がいい。」

「なんで？」

「お前と二人で生活するなんて……」

『ライオンとウサギを同じ牢屋に入れる。んで、五分後にはウサギはライオンの胃袋の中でしたー。』
「みたいなもんだ。」

「いいえ、違うわ。お兄ちゃん。」

私とお兄ちゃんが二人暮らしをするってことは……

『二匹のウサギを同じ牢屋に入れるわ。で、その二匹は夜の男女で二人きりで行う行事を繰り返し、五分後には子供がたくさんいる』
「ようなものよ。」

「おーい、俺の予想を遙かに越え、めっちゃ危ない方向へ進んでるぞ。」

「危ない？どこが？愛があれば全て許されるのよ。」

「いやいやいや！その考えが危ないんだってば！」

「.....」

志織が急に黙り込む。

俺も志織の変化にビビり、黙る。

「うーか、このパターンさつきあつたよね。綾香ん時。」

「ねえ、お兄ちゃん。」

無言だつた志織が話しかけてくる。低いトーンの声で。

「お兄ちゃんは私の事、嫌い？」

「へ？」

「だつてさ、私なんだか避けられる気がするんだもん。」

私はお兄ちゃんの事、大好きだよ？二年間も会えないなんて苦しかつた。ホントは今、凄いうれしいの。

でも、お兄ちゃんは私と二人で暮らすのを嫌がつてる。

だからどうしても私の事を嫌いだつて思っちゃうの。」

コイツそんな風に考えてたのか……。

なんか、悪い事言っちゃったな。

よく考えてみたら兄妹だもんな。そりゃ、血は繋がってねえがそんなことは関係ねえ。兄妹が二人で暮らすって全然おかしいことじゃねえよな。

「わかった。一緒に暮らすか。頑張ろうな。」
「ホントに？やったー」

志織も嬉しそうだ。

これが本来の形だからな。兄妹として。
志織のテンションも元に戻っている。

「じゃあさじゃあさ “アレ” いつやる？今夜？」

“アレ”？なんだそれ？」

「決まってるじゃない。男女が夜に二人きりですることなんて “アレ” しかないじゃない。」

「って何言ってるんじゃない！お前女の子だろ！！女の子がそういうことを軽々しく言うな！！」

「だってお兄ちゃんが聞いてきたんじゃない。」

「やっぱりキャンセルだ！お前と住むこと！」

「さつき “いいよ” ってたじゃんかー！」

「証拠は？証拠はあるのか？」

最低だ。我ながら最低な行為だ。俺。

完璧に俺の勝ちだと、俺は喜ぶ。

が・・・

“わかった。一緒に暮らすか。頑張ろうな。”

志織の左手辺りから聴こえてくる。

その左手にはライター位のサイズの電子機器が握られている。

その電子機器は多分・・・

「ボイスレコーダーよ。」

「いやいや、なんだか俺の声に似てますなあ。」

「当たり前だわ。お兄ちゃんの声を録音したものだもん。こんなことがあろうかと、録音しておいてよかったわ。」

「これでも証拠は足りないかしら？」

なんつーやつだ。計算高いこの計画。コイツは学生なんかやってる場合じゃねえ。さっさとルパンになるべきだ。

「これでも、嫌だっというのなら……」

「なら？」

「学校の皆にお兄ちゃんに襲われたって言いふらす。」

ぎゃー！！止めて！！

そんなことされたら俺、終わる！！！！

「つーか、襲われかけたの俺ですよね？」

「こづいうのは、可愛い女の子の方が有利なのよ。どんなに性格が悪くてもね。」

この子言ってる事、サイテーだー！！

「ただ、なんだか筋が通ってる気がするー！！！！」

「わかりました。大人しくここで暮らします。グスン。」

「やったー。あと、襲ったりしないから大丈夫。安心して。でも、お兄ちゃんが襲いたくなったらいつでも襲ってね。」

「襲っかつつーのー！！！！」

第四話 死闘もどき

point of view 【神崎 零也】

「ふふっ！私、お兄ちゃんと二人で登校するのが夢だったの。」

俺は志織といっしょに学校へ向かっている。朝は一人でいたいのだが、ついつい流されてしまった。

「つーか、この歳で兄妹と一緒に登校する人いんの？」

「お兄ちゃん？愛に国境は無いのよ？」

「明らかに使い方違うと思うぞ。俺ら二人とも日本人だからもともと国境ねえし。」

なんか会話の内容が意味わかんねえがそこは気にしないでくれ。俺らにとっては普通なんだ、これが。

と、まあ適当に歩いていると遠くから声が…

「あ、零ちゃん！一緒に行こっー！！」

綾香が俺を誘う。

んで、隣りにいる志織が綾香を睨む。んでまた、志織の存在に気付いた綾香が志織を睨む。要するに綾香と志織が睨み合ってるってことだ。

「ねえお兄ちゃん（零ちゃん）？だれ？この人」

綾香と志織の音がハモる。綺麗に。歌声のように。だが、怖い。綺麗すぎて。ただ怖い。

「こちらが幼馴染みの月代綾香でこちらが義妹の神崎志織。」

「フーン。」

お兄ちゃんは私と行くから、さようなら。」

「ちよつと待ちなさいよ！！」

私はいつも零ちゃんと学校に行ってるの！！だから私は零ちゃんと行くの！！」

おいおい。朝っぱらからケンカか？つたく、朝からなんでそんなに元気なんだよ。でもまあ、俺が兄貴として。幼馴染みとして。男としてこのケンカを止めるとしよう。

「おい、朝っぱらからケンカなんてして……」

「お兄ちゃん（零ちゃん）は黙ってて！！……！！」

「……はい。」

オラ弱っ！！泣いていい？オラ泣いていい？

《ギャーギャー》

いつまで続くのケンカ？

《ギャギャ》

もっとのばそつぷ

《ギャー——ギャー——》
のばしすぎ

《魚介類ー》

ドコにツツコムべき!?
ってどんなケンカだよ!?

まっ、いいや。
ケンカ止めのめんどくさいから、先行して。
ビバ、楽。

第五話 趣味って大変。それは趣味じゃないから。

point of view 【神崎 零也】

「やっぱり趣味って重要だよなあ。」

建人と学校でメシを食っているとき急にこの言葉が俺の口から出た。

「何だよレイ。お前趣味ねえのかよ？」

「ああ、流石に暇だわ。学校から帰ったあととか。勉強するのもた
りいし。」

「趣味がねえとか、ダメ人間じゃねえか！」

建人ごときにダメ人間と言われた。
切腹もんだわ。

つてか、建人の趣味はなんだろ？

「じゃあ、お前の趣味はなんなんだよ？」

「それは……。」

「それは？」

「ナンパ。」

「は？」

「ナンパだよ。ナ・ン・パ。」

「お前モテんの？」

「お前知らんの？俺、いままでで一回も告られたんだぜ。」

「微妙だな……。」

「しかも幼稚園の頃。」

堂々と自慢してるが果たしてそれはモテるの部類に入るのだろうか

……。

なんだか自虐ネタにしか聞こえない……。

「それってモテるって言うのか？」

「言わない。」

気付いてんのかよ!!

「で、ナンパは成功すんのかいな？」

「五分五分だな。」

「五分五分？」

「ああ、半分は断られるだけだろ。あと半分は……。」

「半分は……？」

「殴られ罵声を浴びせられ断られる。」

おい、まてよ。

すげえ悲しい五分五分じゃねえか。

コイツめっちゃかわいそうに思えてきた。

「百パーセント断られてるってことか？」

「ああ。まあその女子達は俺の魅力に気付かねえ見た目だけのヤツだったってことさ。それに、俺も本気をまだ出してねえからな。」

違えよ、アホ。

お前に魅力がなくあほだつて気付いてる素敵な女子だからフラれてんだよ。

しかも、本氣つて……。

「本氣つて何すんだよ？」

「決まってるだろ！！ここは日本だぞ！日本の文化をなめてんのか！」

日本の文化？

相撲？寿司？しゃぶしゃぶ？侍？忍者？

いや、わかる。多分あれしかない。

「まさか……。」

「ああ。土下座。」

アホがいる。俺の前にアホがいる。

ナンパで土下座をつかう奴いんのかよ。やばいぞこいつ。本格的にやばいぞ。コイツの頭。

「やめた方がいいぞ。土下座は。うん。」

ついでに人間もやめた方がいい。お前以外の全人類が可哀想だ。お前と同じ生命体だと思うと俺も吐き気が……。」

「さらりと言ってるけど、めっちゃヒドいぞ。言ってること。」

「じゃあ、ナンパはもう止める。禁止令だ。禁止令。」

「何でだよ？」

「キモいから。」

「だから傷つくっつーの！もっとやんわりと言えよ。直球すぎんだよー！」

つと話がそれてしまった。
戻さないと……。

「んで、趣味なら何がいいと思う？ナンパ以外な。」

「読書だろ。つーか、それしか思い浮かばん。」

「読書か……。あんま読まねえから何読めばいいか分かんねえよ。」

これマジで。漫画すら読まない。

と、というか本屋に行かない。だから家に本がない。

「じゃあ、帰り本屋寄ってくか？俺がいい本紹介してやるよ。結構本については詳しいんだぜ。」

「頼む。ってかなんだ、おまえ。本読むのか？」

「失敬だなキミは。見た目や印象だけで本を読むか読まないかを決めつけるの良くないと思いますよ。」

建人はメガネを掛けていないのに、クイツとメガネを上げるしぐさをする。

「どんな時に読むんだよ？毎日か？たまにか？」

「たまにだな。フラれた時に心のケアの一環として。」

「悲しい理由だな。」

「つと、昼休み終わっちまう。さっさと食わねえと。」

「で、どんな本を選べばいいんだ？本屋には本が多すぎてどれを選べばいいのかわからねえ。さっぱりだ。」

学校の帰り道。

建人と本屋にいる。久しぶりに来たがやはり本が多い。本屋だから当たり前だけど。

「どんなジャンルがいいんだよ？」

「ジャンル？」

「ああ。SF、ファンタジー、歴史、ホラー、恋愛とか。」

「あーわかんねえ。見て決めるわ。」

「じゃあ俺が探してきてやるよ。」

急に元気になりだした建人は本を探し出すため。小説のコーナーへ向かう。

〳〳五分後〳〳

「ようし、こんなもんだろ。」

小説コーナーから戻ってきた。手には三冊ほど本がある。

「じゃあ、一冊目。」

俺は建人から受け取った本の題名を声に出して読む。

「《宇宙人語辞典。》あなたもこれで宇宙人としやべれるようになるらしい。二万八千円。」

おい！

なんだよ、宇宙人語って。しかも『らしい』ってウワサかよ。しかも題名に値段が入ってるし、高いし。

「ほいつ。二冊目。」

俺はまた建人から受け取った二冊目の本の題名を声に出して読む。

「《メキシコの地図》コレさえあれば目を閉じていてもメキシコを正確に歩ける。」

つておい！

なんでメキシコ？

しかも目を閉じてたらまずこの本が見えないツスよね。

しかも建人は小説コーナーに行ったのになぜ辞典と地図がでてくるんだ？

「んじゃラスト三冊目。」

俺は三冊目の本を受け取り、題名を声に出して読む。

「《犬王国》く犬達の犬達による犬達のための本」

気になる。

内容がすごい気になる。
気になってしょうがない俺は本のページを一枚めくり声に出して読
む。

「ワンッワンワンワンワン。ワンワンワン。バウッ。ワンワン。
」

オール犬語。

『犬達の犬達による犬達の本』ってこういうことか。ってか、犬っ
て本読めんの？

「おい、建人。もっとマシな本はないのかよ？」

「甘いぞレイ。読書というのはこう言うもんだ。」

「いや、違つと思つぞ。俺は。」

あー、めんどくせ。

読書より寝てる方がよっぽどいいわ。

「帰るか。」

「そだね。」

第五話 趣味って大変。それは趣味じゃないから。(後書き)

零也 ずいぶん時間が掛かったな。

作者 ラブコメさせようとしたんだけど思いつかなくて。

零也 で、急にただのコメディにしたら時間が掛かったと。

作者 そういうこと。

第七話 殺人車椅子！！ちなみに被害者は俺。

Point of view

【神崎 零也】

ピピピピピピピピピピピピ

「う〜ん。」

いつもと変わらぬ朝。

ケータイのアラームで起きる。たまにマナーモードにしたままでアラームが鳴らないことがあるが、今日はそんなことはない。故に気持ちの良い朝つつーわけよ。わかる？

ベッドから降りてハンガーに掛けてある制服に着替える。急ぐ必要はない。朝はゆっくりしたい。とはいえ、遅刻はしたくない。と二つの条件をクリアするために行っている早起きのおかげだ。早起きは辛いが目が冴えてしまえばこっちのモンだ。

「お兄ちゃん。おはよう。」

「んあ、おはよう。」

朝ということ、ボーツとしていたため変な声を出してしまった。あー恥ずかし。

「“んあ”ってお兄ちゃんたら、だらしのないなあ。そんなお兄ちゃんのために可愛い妹から目覚めのキスを……」
「いらんわい！！！」

こういった義妹とのセクハラまがいな会話もいつものこと。かわらない。

「って、志織お前日直って言ってなかった？行かなくていいの？」

「あー！ホントだ！もう行くね！行ってきまーす！戸締まり忘れないでねー。」

「あいよー。」

志織は急いで玄関を飛び出していった。

日直じゃない俺は急ぐ必要がないから家を出るまで15分もの暇な時間ができる。俺はこの微妙な長さの空き時間が好きだ。そりゃ、ながい空き時間の方が楽だし良いに決まってるが、それとは違って説明しづらいんだけどな。何かするには短くて何もしないには長い時間。

「ニュースでも見てるかな。」

高校まで歩いて40分程度。自転車を使えばもっと早くいけるのだが、昔転んで痛かったので自転車はあまり好きじゃない。それに一人でゆっくり歩いてるこの時間が好きだ。俺は意外と一人でポーツと考えるのが好きみたいだ。

「~~~~。どっしよ~~~~。」

俺がいつも通り歩いて登校していると車椅子に乗った女の子が困った様子でいる。誰かに押ししてもらってる訳じゃないみたいだ。一人でいるから。

俺は鬼じゃないので、いやむしろ天使。そう、エンジェルなので……ゴホンゴホン！話が反れた。困っていきそうな女の子に話しかける。

「どうした？困ってそうだけど。」

「えっ？その……えっと……。」

急に話しかけたの失敗だったな。ビビられてるやん俺。

「タイヤが段差にひっかかてしまっただけ動けないんです。」

あー。なるほど。

そりゃ、大変だな。車椅子を自ら運転するとなると大変そうだな。

「待ってるよ。ちょびつと持ち上げるから横んどこ持ってるよ。」

「え……。あつ、はい！」

俺は女の子の乗った車椅子を持ち上げる。持ち上げるといっても所詮10センチぐらいの段差を昇るだけなので辛くもなんとも思わない。

「どっこいしょ！！これでオツケイ！って遅刻するぞ？ク　ラ。」

「私は『クラが立った！』で有名な少女じゃないです。車椅子に乗ってるってだけでへんなあだ名をつけないでくださいよ。」

落ち着いた子だがノリが良いみたい。ツッコミは俺の方がうまいけど。

てか時間がヤバい。遅刻する。ま、俺には作戦があるからいいけど。でもその作戦を実行するには、この子の協力が必要だ。

「なあ、頼みがあるんだけどさあ。聞いてくんねえかな？」

「え？はい、何ですか？……」
と、その前に自己紹介を。姫野^{ひめの}真紀^{まき}です。「

あ、忘れてた。俺もしなきゃな。テヘツ。
キモいって言うな。文字数稼ぎだ。

「神崎零也だ。よろしくっ！！呼び方は『お兄ちゃん』で。」

「あっ、はい。分かりました。お兄ちゃん。」

「あー、ギャグだ。マジで言うとは思わなかった。」「もうっ！！
神崎さんのイジワルっ！！」

あははははっ。

可愛いなあ。姫野は……。って何メロメロにされてんじゃ俺は。

「っで、頼みがあるんだよ。」

「あ、はい。何ですか。」

「俺、お前のこと……。」「

point of view 【姫野 真紀】

「俺、お前のこと……。」「

え？告白？

そ、そんなあさつき出会ったばかりなのに。恥ずかしいよ……。

でも、さっき助けてくれた……。
優しいし、面白いし、素敵な人……。
私も好きになっちゃったかも……。
告白ってどんなのなんだろう？
きつと……………。

《 真紀の妄想 零也の告白ver. 》

「俺、お前のこと……………」
「え？」
「真紀のことが好きだ。愛してる。」
「ほんとに……………？証拠は？」
「証拠はコレだよ。」
「ん……………。キスなんて恥ずかしいです。」
「ごめん。真紀に対する気持ちが大きすぎて抑えきれないんだ。」
「零也さん……………」
「真紀……………。愛してる……………」
「零也さん……………。私もです。」

《 真紀の妄想 零也の告白ver. 【終】 》

いやーん。

零也さんたらーっ！！

point of view 【神崎 零也】

おい……………。

なんでコイツはイヤンイヤン言いながらクネクネしてるんだ？
ぶっちゃけ、気持ち悪いぞ。
つとイカン！！目的を忘れるれるトコだった。

「俺、お前のこと……。」

「運んでいいかな？」

「へ？」

「あー。運ぶってというのはつまり、車椅子押すってこと。」

「え？」

「もうこの時間遅刻決定じゃん？だからさ、人助けしてましたっつていうと先生も許してくれるかなと……。」

プルプル

おい。姫野なんか震えてるぞ。

「零也さんのばか。」

「へ？」

「零也さんのばかああ……！！……！！」

「グハア……！！」

姫野はなぜか車椅子で俺に突撃してきた。要するに引かれたわけだ、

車椅子に。せつないな……。

「もう零也さんなんて知らないっ！！！！！」

俺を吹っ飛ばし、その勢いを止めず学校の方へ。

そのスピードは車道走る車に並ぶほど……。

……車に並ぶ……

速っ！！

あっ！！車位のスピードが出る椅子から『車椅子』って言うのか……

納得……

……するかーいつ！！！！！！

はあはあ。あぶねえ。意味わかんねえ方向に自己解決しまつたコ
だったぜ。

『車椅子』は椅子に車輪がついてるから『車椅子』だろうがっ！！

「……………つて、やべえ！！時間がねえ！！急げ！！
疲れない程度に。」

というわけで、いつものペースでゆっくり歩きましたとな。

教室で痛い目に合うと知らずになー！！

第八話 無視

point of view 【神崎 零也】

車椅子の少女にぶつ飛ばされようやく教室にたどり着いたぜ。
心も体も満身創痍だけどな。

つと、もうHR始まつてるな。まっ、いいや。何事も無かったように教室に入ろう。うん。

ガラガラガラガラ（ドアを開けた音）

「おはようございまーすっ！ー！！」

.....

し~~~~~ん。

「へ？」

何？この空気？

なんでみんな俺を可哀想な目で見んの？

しかも、先生は下向いてプルプル震えてるし……。もしかして……怒ってる？

「オラア！！神崎い！！遅刻してんじゃねえ！！コレでもくらって

反省しやがれえっ！！！！」

先生の怒りの叫び。

そして、先生の手から放たれる“何か”。

こちらへ向かってくる。どーせ、チヨークだろ。

そんなの、ちよっと見極めればかわせるっつーの。

見極める……。

……っつて、あれ？でかくない？チヨークの割りには。

っつてよく見ると、もしかして……。

もしかして。

もしかして………。

「教卓じゃねえかああああ！！！！死ぬっつーのおおおお！！！！」

point of view 【クラスみんな】

「教卓じゃねえかああああ！！！！死ぬっつうのおおおお！！！！」

ドシゴオン！！！！！！

あ、神崎が倒れた。

まあいいや。

「「「「無視しよう。「「「「」

「いやいやいや。そこは助けとけよ。」

神崎零也はそう言いながら……

気絶した。

point of view 【神崎 零也】

「ん〜。いつてえ。「冗談じゃねえよ。」

意識が戻ってきた俺はそう愚痴りながら目を開ける。

「保健室か？ここ？」

目を開けて最初に視野に入ってきたのは教卓だった。教卓が俺の上に乗っかっている。その教卓のせいで周りが見えない。

つてか教卓が乗っかったままっつーことはココ教室！？

俺のことほったらかしかい！！

そんな俺は助けを求める。

「誰かー助けてー！」

返事が返ってこない

俺の発するSOSも無視。完璧な無視だな。そんなことあってもめげないもん。

がんばる、俺。

「って、クラスの連中。俺が気絶してるの完全に無視しやがって。完璧なチームワークじゃねえか！しかも俺のいないところで！泣けてくるぜ。」

とりあえず教卓が体に乗っかって動けないので、体の上からどかして立ち上がる。

「どっこいしょ。って誰もいねえじゃねえか！しかも、すでに夕方！！」

完璧すぎな無視。パーフェクト無視！！！」

.....

ギャラリーいないからさ、無反応なのはわかるけどさ。やっぱり悲しいよな。グスン。

「っと、もう帰るかな。」

廊下に向かう俺。多分、夕焼けが似合いそう。

ど〜も。最初の方は出番あったけど最近全く出番がなかった零ちゃんの幼馴染みで未来の零ちゃんのお嫁さん……。キヤー！！言っちゃった。恥ずかしー！！な、月代綾香です。

今回、私は射殺された零ちゃんを迎いに来ました。みんな零ちゃんを無視してた（私もしてたけど…）ことが可哀想だからね。そしたら、零ちゃんが……。

《 月代綾香の妄想 零也の感謝ver. 》

「零ちゃん。迎えに来たよ。」

「綾香……。お前だけだよ。俺の事を想ってくれるのは……。」

「だって……。私は零ちゃんの幼馴染みだから……。」

「なあ、俺はお前にとって何なんだ？ただの幼馴染みなのか？」

「え？」

「俺はお前を大切な人だと思ってる……。昔よく遊んだからとか幼馴染みだからとかじゃなくて……。好きだから……。愛してるから。」

「零ちゃん……。私もだよ。零ちゃんのこと大好きっ！！世界中の何よりも……。」

「綾香……。」

「零ちゃん……。」

《 月代綾香の妄想 零也の感謝ver. 【終】 》

いやん。零ちゃんったら!! 恥ずかしいよ。そんなこと。
…… っていけないいけない。妄想してる場合じゃない。もうすぐ目的地に着く。

後はこの角を曲がるだけ……。

名前を呼びながら、抱きつこう。

あっ!! 見つけたっ!!

「零ちゃん!! 怪我大じよ……え!？」

私は驚いた。

だって……。零ちゃんが……。

零ちゃんが……。

零ちゃんが知らない人と抱き合っていたから。

第八話 無視（後書き）

零也 「なあ？俺、一つ気づいた事あるんだけど。」

作者 「何だい？」

零也 「第六話がないぞ？第五話の次が第七話になってる。」

作者 「気づいてるにきまつてるだろ。ただ俺の器が大きいからそのままにしてあるだけだよ。」

零也 「器が大きい……って使い方違わないか？ただめんどくさかっただけだろ。」作者 「……。」

零也 「あと、第七話で自転車乗らないって言うてんのに、第一話の登校の時に乗ってるし、第二話で同日の下校の時は徒歩だし。」

作者 「気づいてるに決まつてるだろ。ただ俺の器が大きいからそのままにしてあるだけだよ。」

零也 「器が大きい……って使い方違わないか？ただめんどくさかっただけだろ。」

作者 「……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0152d/>

零也の日常。

2010年10月8日11時43分発行